

KUMADAI TSUSHIN

熊大通信

Vol.26
Oct.2007

特集 知と社会 Vol.26
剛毅木訥
永遠なれ、五高魂



Kumamoto University

国立大学法人 熊本大学



熊本大学の約束(KU4U)

Kumamoto University For You

私たちは、熊本大学を開かれた心地よい環境の大学として、次の4つのことに全力を投入します。

Upgrade

未来を生き抜くプロフェッショナルの養成

Union

地域連携と社会貢献

Unique

新たな知的価値の創造

Universal

留学生教育と国際貢献

CONTENTS

1 知と社会 Vol.26

剛毅木訥 永遠なれ、五高魂

6 夢の実現 Act.14

“通説”に挑戦する日々を積み重ね、 知のバトンを後世に

熊本大学法学部法学科 教授 大澤 博明

8 地域とともに

環境、経済、資源 海から地域と未来を考える

熊本大学沿岸域環境科学教育研究センター

10 卒業生を訪ねて

声に出して表現してみることで、 夢は必ず叶います

KKT くまもと県民テレビアナウンサー 村上 美香さん

12 国際交流

国境を越えた共同研究で 若い世代をもっと元気に、ハッピーに

熊本大学大学院自然科学研究科 教授 宇佐川 毅

14 熊大 INFORMATION

おすすめの一冊 熊本大学医学部保健学科 教授 森田 敏子
CAMPUS 歴史さんぽ

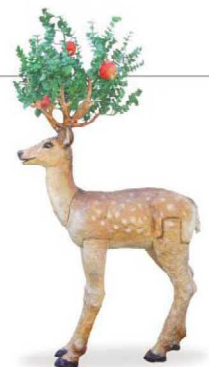
表紙 DEER 材料(新聞紙、紙粘土、針金など)

作者/中村靖浩 NAKAMURA YASUHIRO

プロフィール：熊本県天草生まれ。熊本大学教育学部美術科卒業。ゲーム制作会社でグラフィックデザイナーとして7年勤務。現在、紙を使った立体作品を中心に制作、活動中。

<http://www1.newweb.ne.jp/wb/spankposs/>

コメント：鹿です。大きさは等身大です。小さい子供が乗れるくらいです。角から実がなっています。これは作品の一部ですが、近々、物語がみえる作品に仕上げるつもりです。紙の作品は、少し荒めの表面処理を残すことによって、手触りや存在感を感じられるようにしています。



「特集」知と社会 Vol. 26

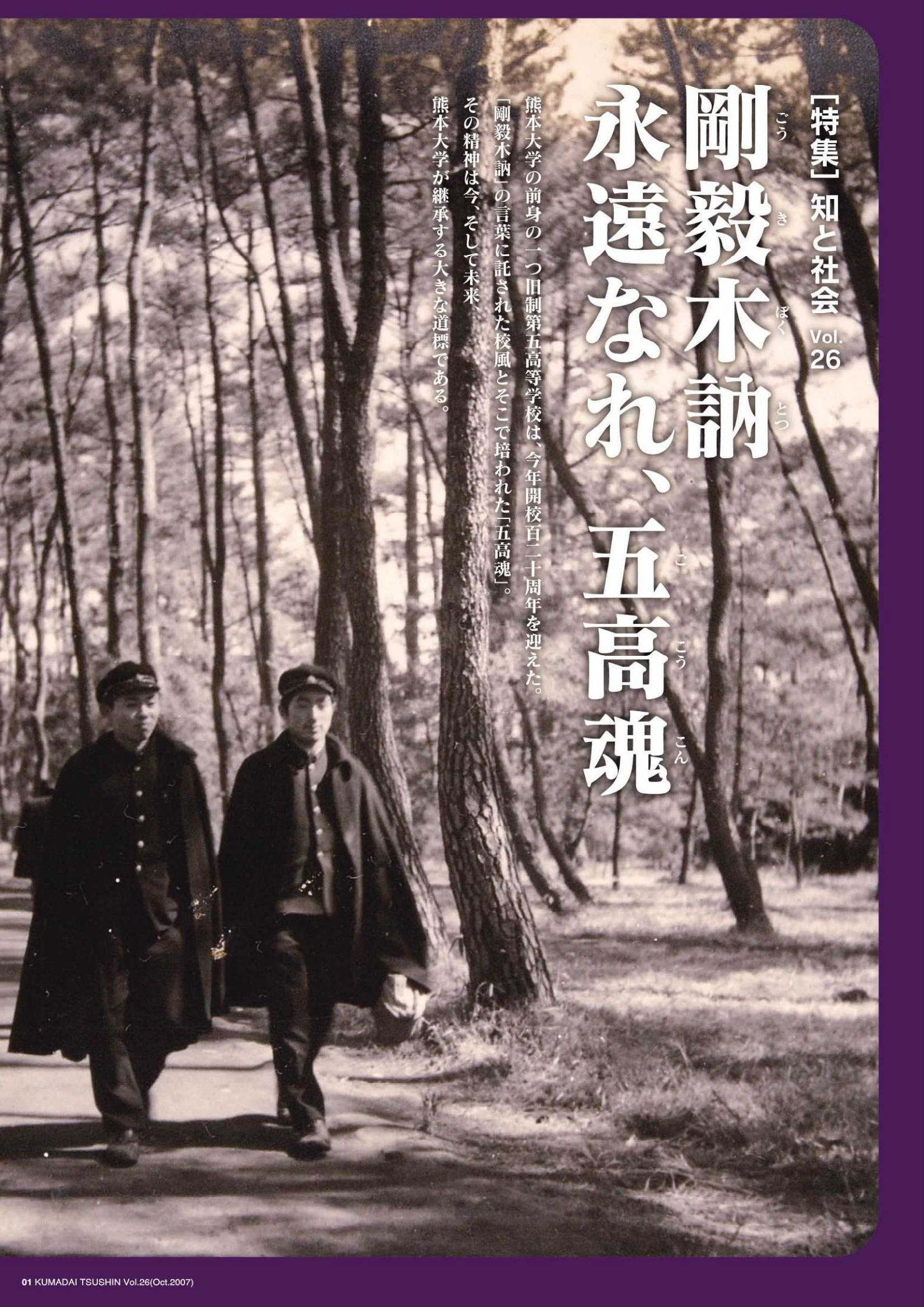
剛毅木訥 永遠なれ、五高魂

熊本大学の前身の一つ旧制第五高等学校は、今年開校百二十周年を迎えた。

「剛毅木訥」の言葉に託された校風とそこで培われた「五高魂」。

その精神は今、そして未来、

熊本大学が継承する大きな道標である。





文学部 三澤純准教授

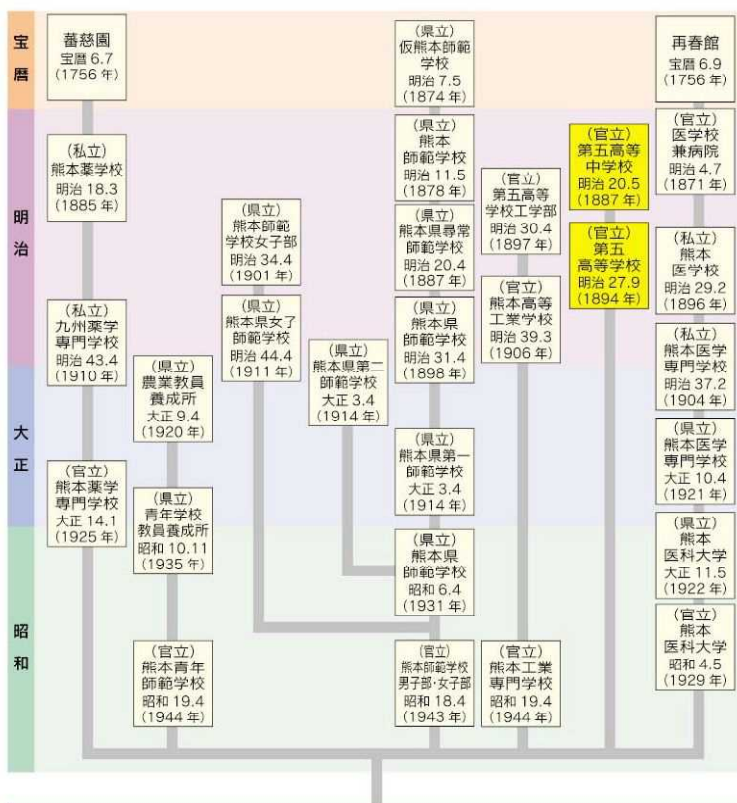
言われずとも、自ら学べ

旧制第五高等学校（後に旧制第五高等学校）は、明治20（1887）年の開校から、昭和25（1950）年に最後の卒業生を送り出すまで、63年間続いた。「時代によって学生生活は多少異なりますが、変わらないのは、教授たちが一方的に教え込むのではなく、あくまでも生徒の自主性を育て学ばせるという環境があったことでしょう」と、五高百二十周年記念の図録作成に携わった熊本大学文学部の三澤純准教授は語る。

現在の教育制度でいえば、高校3年および大学1・2年と同年代の青年たちが、寮で共に生活しながら勉学に励み、多感な青春時代を自由と自立心あふれる五高で過ごした。教授たちは、手とり足とりの指導はしない。「勉強しろ」とさえ言わない。「いずれ国家を担う人間なら、言われずとも自ら学べ」というわけだ。そんな態度で臨まれたら、生徒が奮起しないわけにはいかない。

五高においては、夏目漱石、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）、秋月悌次郎

熊本大学の沿革



熊本大学 昭和 24.5 (1949年)

（注）など、近代史に残る人物たちが教授陣に名を連ねただけではない。内閣総理大臣の池田勇人・佐藤栄作、物理学者の寺田寅彦や劇作家の木下順二ほか、数多くの人材を輩出し、各界において近代日本を創造する一端を担った。

寮の食事も生徒の自治活動で

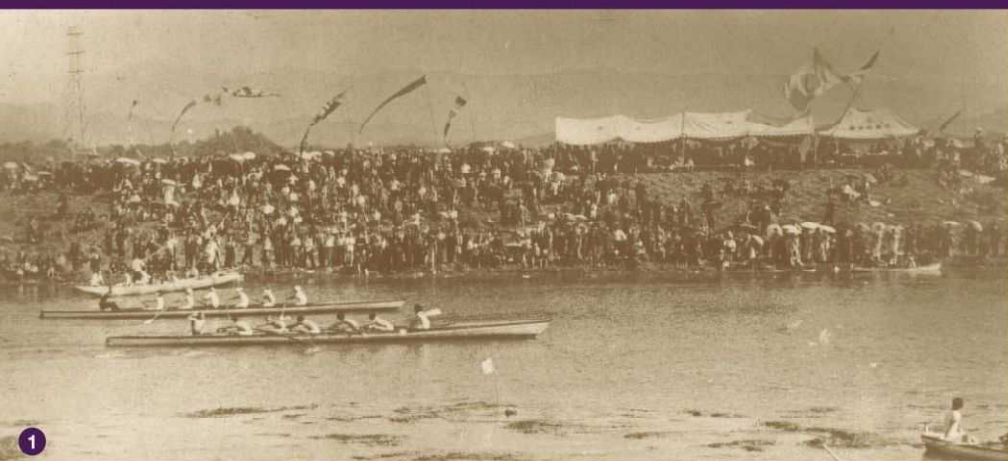
五高生の特性を物語るものの一つに、「習学寮での「生徒自治」がある。中でも、食事に関して集金から

COLUMN

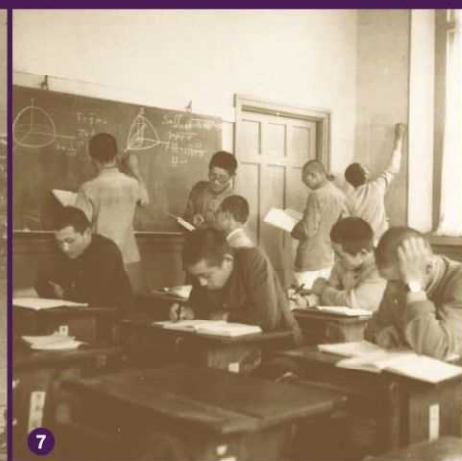
日本国家を担う人材の素地を作る場

明治時代に開校した旧制高等学校のうち、第一（現在の東京大学）から第八（現在の名古屋大学）までの旧制高校を通称「ナンバーズクール」と呼び、他の地名を付けた旧制高校と区別している。旧制中学校卒業後、旧制大学に進むまでの3年間、文科と理科に分かれ、語学や一般教養を学んだ。卒業生のほとんどが旧制帝国大学へ進学。旧制高校に進学できたのは、当時の成人男子のわずか1%で、将来の日本国家を担う人材の素地を作るエリート養成の場であった。

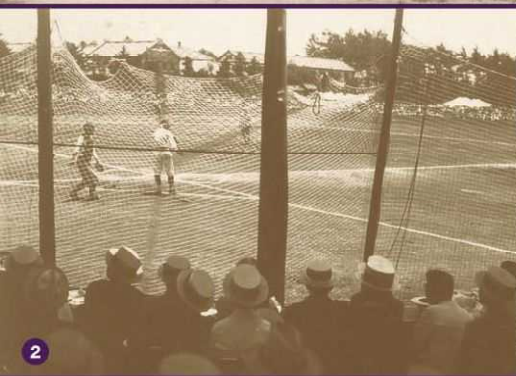
（注）元会津藩士。明治維新後は、胤永（かずひさ）を名乗る。漢学・倫理の教師として「剛毅木訥」の校風を育み、同僚であったラフカディオ・ハーンが「神のような人」と言って敬愛し、現在に至るまで多くの五高生から敬慕されている。



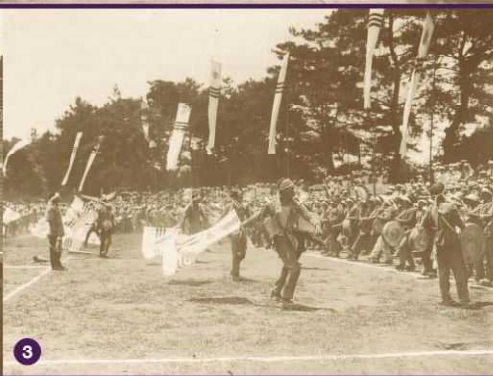
1



7



2



3



8



4



5



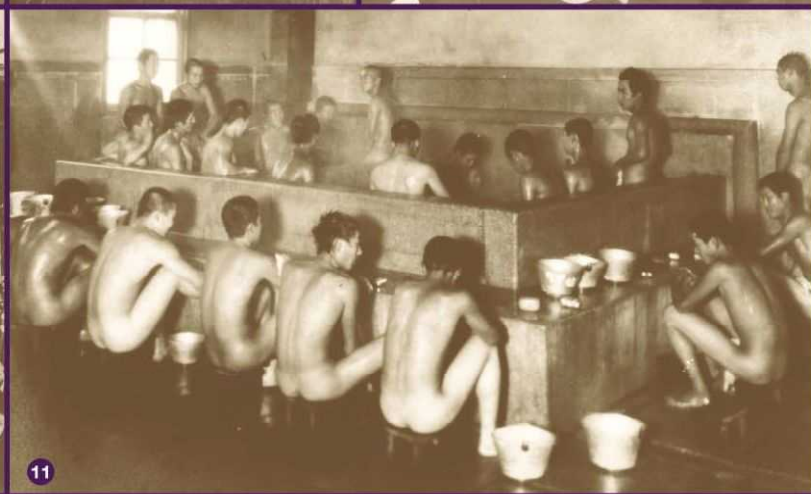
9



10



6



11

五高グラフィティ

Graphity

1 / 江津湖で実施されていた文理科対抗ボートレースも多くの市民に親しまれた恒例行事だった。2・3 / 旧制第七高等学校造士館（鹿児島）との間で行われていた野球の定期戦は、熊本では「七高戦」と呼ばれて、市民も大勢応援に駆けつけた。写真2は大正15(1926)年に武夫原で行われた試合、写真3はその応援合戦の様子。この時の試合は応援合戦が過熱して一大騒動となり、以降、第二次大戦終了まで対抗戦は中断された。このエピソードを題材にした映画『北辰斜めにさすところ』（神山征二郎監督）の口ケが昨年、当時の面影を残す熊本大学の五高記念館前などで行われた。4・5・6 / 五高生のバンカラぶりが大いに発揮されたストームは、阿蘇、寮の中、そして市街地でも行われた。7 / 授業風景 8 / 習学寮に掲げられていた寮生誓詞 9 / 習学寮での勉強の様子 10 / 寮の食事風景。炊事も生徒の自治活動の一つとして行われていた。11 / 寮の入浴風景。生徒のそばにあるバケツは入学後すぐに購入を勧められるもので、洗面、入浴、洗濯などあらゆる場面で活用された。



今も現役医師として活躍している室原さん
(昭和18年秋繰り上げ卒業)。

炊事の手配まですべてを生徒たち自身で行っていたのは珍しく、他校からも視察に訪れるほどだった。

明治時代の寮の宿直が書いた『生徒課日誌』を分析した三澤准教授によると、

「2月15日は、炊事記

念曰“として、折り詰め弁当のほか、時代によつてはお酒も配られ、昼間はスポーツ大会、夜は教授や生徒たちによる演劇などの余興が行われました。しかし、生徒たちにとっては消灯後が本番。裸で金たらいを叩いて踊り回るなど、いわゆるストームの騒ぎがあったと書いてあります。割られたガラスの枚数や宿直室への“夜襲“の有無などが淡々と記され、そうした生徒たちの行動は若者のエネルギー発散の場として受け止められる寮風だったようだ。

とはいえ、校長から「禁酒令」が発令されたこともあり、朝、寮に置かれたビールの空き瓶を宿直者が問題視していたことも日誌から分かる、と三澤准教授。頃は明治。ビール一瓶が大工や左官の日当の半分にも値した。大人の一步手前の青年たちを一人前の大人とし

て扱うことは、当ても複雑な局面があったようである。ただ、寮生活で多少羽目を外すことがあつても、相当勉強しなければならぬ3年間だったことは確か。赤丸(今でいう赤点)を6つ取ると落第し、2年続けて落第すると、退学処分とされた。五高生たちは寮生活を通し、切磋琢磨し団結する心を学んだ。

年々熟成される友情

「寮で他の生徒と一緒に暮らしているとね、この世に“秀才“はいるもんだと思ひましたよ」と語るのは、昭和16年に入学、第二次世界大戦のため、18年秋に繰り上げ卒業した室原(いとう)さん。熊本市在住だ。「それほど勉強している様子はないのに、成績の良い生徒がいた。その傍らで僕のような凡才もいた。まさに玉石混交でしたね」と述懐。毎年開催している18年卒業生の同窓会を「五高生たちが大きな樽に入れたブドウの一粒一粒だったとするならば、良質のワインが出来上がるように、年々、友情が熟成されていると感じます」と話す。

五高ポート部に所属した室原さんは、熊本の緑川河口から長崎県の島原まで、時化(しげ)の中をポートで渡った経験がある。「うまい部員が乗ったチャンピ

オン艇とセコンド艇に分かれましてね。地元の漁師たちに危険だからと止められたんですが、部員の中に豪傑がいたんですよ。今思えば危険な練習だが、それも生徒の自主性任せ。先生が干渉するようにはなかったという。当時、江津湖で開催されていた文科と理科のクラスで争うポートの文理科対抗戦は、市民ファンも大勢駆けつける恒例のイベントとなっていて、「私たちが艇庫の近くにある店で勝手にまんじゅうを食べても、店の人は我が子を見るように黙って見ていてくれた」と笑う室原さん。「まちの人にも愛されていた」という五高生。市街地に繰り出したストームで電車をとめることがあつても大目に見てもらえた。

人生のバックボーン

「私たちがとりわけ五高時代を懐かしむのは、3年間が、まったくの自由であった“からです”。五高開校百二十周年記念大会の世話人を務める水田宗昭さん(東京在住)も言う。

昭和22(1947)年に水田さんが入学した頃は、戦後の食糧難の時代。サイロカーブの東側の「東光原」と呼ぶグラウンド(現在の附属図書館辺り)もカライモ畑になっていた。だが、自主性を重んじる校風は揺るぎなかった。「寮の規

特集

SPECIAL EDITION



「五高時代の同級生は利害を度外視してつきあえる友だちです」と語る水田さん(昭和25年卒業)。

則とか、これをやってはいけない、というような指導はありませんでした。寮長から寮歌やストームについては教わりましたが、校則も知りませんでしたよ。先生からも「勉強しろ」と言われたことはありませんでした」と

笑う。「ただ在学中は、腹が減ったとか、電灯が暗いとか、そんな目先のことはかりにとらわれていた。しかし卒業してから、自分には知らず知らず五高の精神が息づいていると感じたんです。五高開校当初から伝わる校風の『剛毅木訥』は、建前ではなかったと気付きました」

「剛毅」とは志を強く持つこと、「木訥」は素朴であれ、小賢しいやりにくく物事を済ませるなどという意味だ、と水田さん。「自主・自立心がおのずと養われる教育環境とこの五高精神が、その後の自分の一生を支配したと、五高卒業生なら誰もが言っはずです」

**理想を高く、志を強く、
そして素朴であれ**

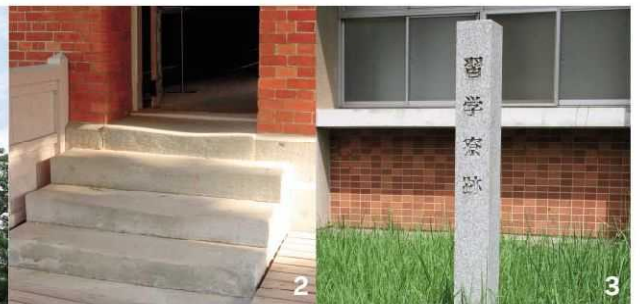
論語の「剛毅木訥は仁に近し」に由来

する「剛毅木訥」の校風について、明治42(1909)年、五高教授であった由比賀(いたが)は「剛毅木訥論」の中で、「龍南(りゆうなん)の学風は何時まで剛毅木訥であつて、(中略)吾輩(わがら)は健児(けんじ)諸君の理想が何処までも高、遠、大であることを望むと同時に、其の理想は堅実に諸君の現実と、調和する様に何事も飽まで研究的態度を執られんことを切望する」と記した。

当時の建物がそのまま残り、国の重要文化財に指定されている熊本大学五高記念館。熊本大学は今、この記念館を拠点に、学内に残る多くの貴重な施設や資料を整備、保存し、今後の教育や研究のほか、地域貢献活動に活かそうと、「熊本大学ユニバーシティ・ミュージアム構想」を掲げ、その実現を目指している。

五高記念館の伊藤重剛館長(熊本大学大学院自然科学研究科教授)は、「戦後の教育制度改革により消滅した旧制高校の貴重な建物と資料の両方を今に残すのは、全国でも熊本大学だけです。このことを今の学生たちがもつと知り、熊本大学がその流れをくんでいることに誇りを持って欲しい」と語る。

理想を高く、志を強く、そして素朴であれ。その精神は時を越えて変わらない、五高のそして熊本大学の大切な魂だ。



1 / 風格のある赤煉瓦の建物が伝統を感じさせる五高記念館。記念館入口として利用されている正面玄関は、当時、開かずの扉で、教師や生徒たちは他の出入り口を利用していた。2 / 記念館裏口の石段は、寮と教室を行き来した生徒たちに踏まれて大きく磨り減り、カーブしている。
3 / 五高記念館の裏手、現在の文学部・法学部棟の前に建てられている習学寮跡の碑で、当時あった寮の玄関前にあたる。

法学部 法学科

教授 大澤 博明

”通説“に挑戦する日々を積み重ね、 知のバトンを後世に

政治・経済・社会のあらゆる事象を内包して紡がれていく歴史。それを紐解いているのが、日本政治外交史を専門とする大澤博明教授です。研究の中で培った学問的なカンを頼りに、膨大な史料にあたり、論理を構築する。根気のいる作業の積み重ねの先に、教授が求めるものは何なのでしよう…。

通説に疑問を持つ

「例えば、明治27（1894）年に起きた日清戦争。日本は、明治初期から朝鮮の排他的支配を意図していた。しかし、朝鮮支配をめぐって清（中国）との対立が激化し、清の影響力を排するために対清戦争を決意。全力を尽くして軍備を拡張し、時機を捉えて清を挑発して強引に戦争を引き起こした」という構図が、従来の通説です。それは、第2次世界大戦後の研究を基に形成され、多くの研究者がその立場や観点を共有する、いわば、常識化した考え方です。でも、それは少し違っんじゃないか、というのが僕の考えです。大澤教授は控えめな口調で切り出します。

「当時のイギリス・フランス・アメリカなどの史料には、日本は清と戦争

をするつもりはなく、逆に友好関係を深めてゆこうとしている、と観察するものが多く存在します。また、通説は、朝鮮を単独支配するためにジャマになる清を武力で排除するために全力で軍事を強化したとも説明してきましたが、当時の日本海軍の軍人でさえ日本の戦力で清に勝るとは考えていなかった。軍事のプロがこれじゃ勝ち目がない、と言っている程度の軍備だったわけです」。次第に話が熱がこもります。

発想を転換する

「勝つ見込みがないと思われていた軍備であっても、勝ってしまった。その結果から、これまでの研究では、清を打ち負かすための軍備拡張策だと言ってきたわけですが、それは、後知恵

ではない。そうであるならば、清と戦争しても勝てるかどうかわからない程度の軍備を持つことの意味は何であったのか、というように考えてみる。そんな発想の転換が必要なのだと思います。相手を屈服させるつもりがなければ、ほどほどの軍備しか持たないでしょ？仲良くしたい国との関係ではなおさらでしょ？そう考えると、日清戦争が起きる理由は、これまでの通説的説明とは大きく異なる説明が必要となってきましたし、日清戦争全体の印象が大きく変わってきますよね。間に合わせのような軍備で、“大国”の清に勝ってしまった日本。そのことがその後の日本にどんな影響を与えたのか。教授が提案したこの説は今、日本政治外交史の中に新しい議論を巻き起こしています。

史料を読み解く日々

通説に対して、何かしっくりこないものを感じる。全ては、そこから始まるという大澤教授。「かつて眼にした通説とは矛盾する史料の断片が頭の中を駆けめぐり、そして、そととささやきかけるのです。わたしをもっとよくみて…。通説に芽生えた疑問点や気になる矛盾点をほったらかしにするのではなく、逆に、その疑問や史料から物事を見直せばどういった歴史像が形成できるのかな、という一種のカンを大切にします」

断片的な史料を手がかりに、官庁や国会図書館にある、膨大な量の公文書や手紙類などの史料にあたり、とにかく読みます。「一定の仮説に基づくと選別基準と経験、カンを頼りに読み込んで

いくうちに、仮に1万ページの史料の中から、とりあえず必要なと抜き出すものが百ページ程だとすると、うち実際に使うのは10ページ程度。1日の大半を史料を読んで過ごすことも珍しくありません。確かに根気がいるし、何より、面白いと思わなければ続かないでしょうね」

通説をひっくり返す快感

「史料が材料・食材だとすれば、理論は包丁さばきや料理方法。どの食材を使い、どう手を加え、どういう色・形・風味の料理に仕上げるか。これまであまり使われてこなかったり知られていなかった材料をふんだんに使ってみたり、同業者ならだれでもよく知ってい

る史料の調理方法を変えてみるなど、試行錯誤を繰り返します」

こうした地道な作業の果てに、ようやく浮かんでくるイメージ。とらえどころがないとも思える対象に何度もねばり強くアタックし、ヘトヘトになりながら埋もれていた小さな宝物をようやく掘り起こしたかのような感覚。自分を納得させられる、「これだ!」という像。そして、「これまでなかった説明(歴史像)を提示できたときの気分は本当に爽快!」と、やっとなにつこりする大澤教授。

学問の発展に貢献できる喜び

「確たる目的を持って法学部に進んだわけではありません。高校生までは日

本の近代にはあまり関心はありませんでした。学部生時代に、近代日本が経験した戦争のメカニズム、戦争と平和の理論と実際に興味が向いたことから、研究者としての道へ進みました。でも、それだつて、絶対にこれ、という進路の決め方ではなかった。だから、大学院に進み、勉強の質や量が学部生の時代と全く違うと思いついた時には、自らの浅はかさを呪い、大学院なんかに進学しなけりやよかつたという気持ちになりました。迷いや悩みを抱きつつ過ごした若き日々もあつたようです。「結果的に好きなことを仕事にできて、ずっと続けてこられたのは幸せだと思つ。ちよつと乱暴な表現ですが、通説をひっくり返す快感が、エネルギーかな」

研究職という仕事について、「私自身が扱っていることはごく限られた領域の専門的問題です。ただ、歴史が残したたくさん史料や先輩研究者の先行研究を従来の像とは違う別の視点で観る。それが次の研究や発見につながっていく。そう考えると、自分も専門分野の発展と継承に関わっているのだから、と思います」と教授。「我々の仕事の評価はむしろ後世に待つ、という気分があります。20年、30年経つて、後輩研究者に引用される論文を残す。それくらい価値のある研究ができれば、嬉しいですね」。長い時間をかけ、人から人へと渡されていく知のバトン。地道な研究を積み重ね、たゆまず走る人の確かな存在意義はここにあります。

PROFILE

大澤 博明(おおさわ・ひろあき)

熊本県出身。熊本大学法学部卒業。大阪市立大学大学院法学研究科後期博士課程単位取得退学。東京大学助手、熊本大学助教授を経て、熊本大学教授。東アジア近代史学会理事、日本政治学会会員、日本国際政治学会会員。



天草地域は、白く大きなはさみで求愛することで知られるハクセンシオマネキの日本一の群生地。逸見教授らはこのような沿岸域の生物の研究も行っています。



逸見教授が「おいしいだけでなく、貝殻の模様的美しさで群を抜いている」と話す熊本産ハマグリ



今年7・8月にセンターが開催した「ひがたのいきもの観察会」。小学生以下の子どもたちを対象にした観察会では、逸見教授の分かりやすく楽しい指導が好評です。

熊本大学沿岸域環境科学教育研究センター
<http://engan.dc.kumamoto-u.ac.jp>

地域と
ともに

環境、経済、資源 海から地域と未来を考える

日本全体の干潟面積の約6割にのぼる広大な干潟を持つ有明海・八代海。干満の差が大きく、最大潮位差は5m以上にも達します。この干潟浅海域は、多様な生物の棲息地であり、古くから大きな経済的価値をもたらしてきました。しかし最近では、環境悪化などが発生、社会問題になってきています。

時代の要請に応え、地域社会に貢献しようと、熊本大学が平成13年に、全学共同施設として発足させたのが、熊本大学沿岸域環境科学教育研究センターです。

特異で貴重な有明・八代の海を活かす拠点に

「陸域と海域が接する沿岸域には、複雑な生態系が形成されていて、さまざまな生物がいます。また、沿岸域は人間の活動の影響が集約する場であり、陸域と海域の間の物質交換が活発に行われる境界域でもあります。広大な干潟を有した有明海・八代海は世界的にも特異で貴重な場所なんです」と、沿岸域の魅力を語るのは、センター長の内野明徳教授。沿岸域における生態系、環境汚染物質の分布、水の営力による土砂などの輸送や移動の解明は、良好な環境を保全する上でも、将来の地球環

境を予測する上でも、貴重な鍵となっています。

地域活性化にもつながる熊本ハマグリの研究

内野センター長やセンターの逸見泰久教授らは、平成17年度から、現、本学政策創造研究教育センターのプロジェクト研究として「有明海・八代海の生物棲息環境の評価・保全・再生」に取り組んでいます。その中で18年度は「ハマグリ資源の管理技術の確立」が中心課題でした。「熊本県はハマグリが生産量が日本一です。個体の殻の模様も美しく、トップレベルの価値を持っているのに、ほとんど知られていません。計画的な管理を行い、ブランド化や地産地消が確立されれば、地域にとって大変有益なはず」と話すのは、逸見教授です。ハマグリは、縄文時代の貝塚でも大

量に見られる貝類で、最近までは全国の干潟で見られるものでした。しかし1980年代になって漁獲量が激減、現在では多くの県で絶滅危惧種に指定されているほどです。

「ハマグリは、草原の草のようなもの。生態系の基盤となつて他の生物の生存を支え、また、水をきれいにする働きも担っています。資源量を回復すれば、水産上のメリットだけでなく、生物多様性や干潟環境を改善する上でも大きな意義があると思います」と逸見教授。「管理技術の確立には、行政・漁業者の合意形成と資源管理に対する理解が不可欠です。ハマグリは棲息状況や漁獲状況を調査し、結果を示すだけでなく、先行事例との比較、流通経路や漁業補償まで含めた総合的な研究・提案を行います。熊本ハマグリをブランド化に向けて、第一歩を踏み出したところで」と意欲的です。

海の魅力と不思議を共に

センターはまた、広く一般市民を対象にした開放科目や公開講座を設けています。他大学などと共催する「みらい有明・不知火シンポジウム」、市民公開



沿岸域環境科学教育研究センター長
内野明徳大学院自然科学研究科教授

講座「有明海・八代海を科学する」、ワークショップやハクセンシオマネキの観察会などがそれです。さらに、アジア地域の干潟沿岸域環境研究のネットワーク拠点として、韓国との共同研究も行ってきました。「目的は研究成果を地域に還元したり、干潟浅海域に関する環境教育の充実させること。多くの方に参加いただいたいており、中には毎年参加する熱心な方もいて私たちにもよい刺激です。研究と教育の両方ができるのが大学のよいところ。これからもその利点を活かし、海の魅力と不思議を多くの方と共有していきたい」と話す内野センター長。

その活動が、よりよい地域環境の保全と創造に貢献し、地域活性化につながっていきます。

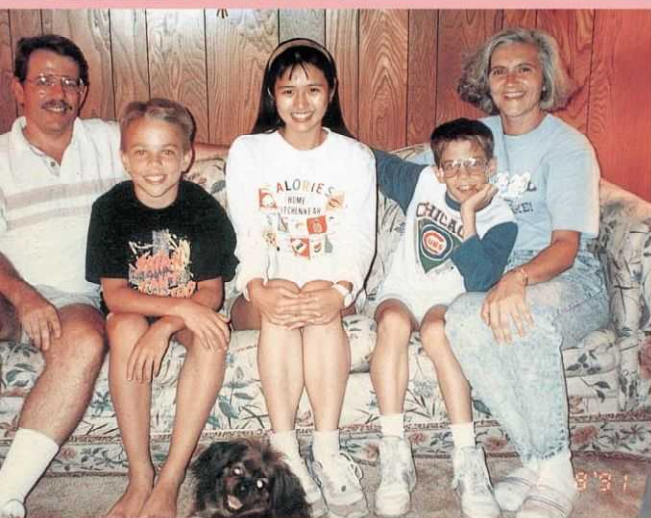


沿岸域環境科学教育研究センターの海洋施設
【合津マリンステーション】(上天草市)

同センターは、干潟沿岸域の生物多様性や生態系の解明のほか、持続可能な水産資源の保存や開発、自然調和型の沿岸域の保全・開発・防災などの教育研究を行い、熊本県における沿岸環境科学の中心的な役割を果たしています。



沿岸域環境科学教育研究センター
逸見泰久教授



上)ばってん荒川さんの教えどおり、笑顔で情報を伝える村上さん
下)アメリカ横断の旅で、ホストファミリーの人たちと。交流は今も続いています。

PROFILE

村上 美香(むらかみ・みか)

熊本大学文学部地域科学科卒業。夕方の情報番組「テレビタミン」などで活躍中。取材をきっかけに“動物虐待問題”に関する講演活動を行っている。



KKT くまもと県民テレビアナウンサー 村上 美香さん

いつもさわやかな笑顔の村上美香さん。KKTくまもと県民テレビの夕方の情報番組でもおなじみの顔です。

実際にお会いすると、愛らしくさわやかなイメージはそのままに、しかし、そこには仕事に打ち込む大人の女性としての決意と品格もかいま見ることができました。

キラキラ輝く瞳でアメリカ横断した学生時代のこと、アナウンサーという仕事について、後輩達へのメッセージなどを語っていただきました。

声に出して
表現してみることで、
夢は必ず叶います



子どもの頃の遊びは 「アナウンサーっぴっぴ」

アナウンサーを目指したきつかけは、母親です。母は若い頃アナウンサーになりたかったらしく、私が子どもの頃から「アナウンサーはいいいよ」「素晴らしい仕事だよ」とよく聞かされていたんです。その影響でしようか、子どもの頃の遊びはもっぱら、アナウンサーのまねごとだったんですよ。

小学校に入ると、国語が得意科目になり、特に朗読が大好きでした。「お昼の放送です」「なんて、放送委員もやっていました。

その後、「保育士になりたい」と思ったこともありましたが、大学に入る頃には、やはり「将来はアナウンサー」というのはっきりした目標を持っていました。

「学校が大好き」毎日が楽しく、 充実していた学生時代

私は小中高校、大学と、とにかく学校大好き少女だったんです。特に大学時代はゼミや学科を越え、同じような夢

を持った仲間が集まって、お互いの夢を語り合ったり、励まし合ったりして過ごしていました。学園祭で焼鳥屋をやったり、女の子ばかり8人で夏休みアメリカ横断をしたりとにかく大好きな仲間たちといろんな事に挑戦しましたね。

アメリカの旅ではリュックを背負って、途中、ホームステイをしながら、ロサンゼルスからニューヨークまでバスで横断したんですよ。アメリカ人の友達もたくさんできましたが、痴漢にあつたり怖い思いもしました。おかげで、この旅でかなりたくましくなれて。このとき出会ったホストファミリーの人たちとは、メールを交換したり、今でも交流が続いているんですよ。

大学時代と言えば、とても印象に残っている先生がいます。もと新聞記者をされていた方で、今、世の中で起きている事を、いかにタイムリーに、どういう風に伝えるか、どういう意味があるのかを教えてくださいました。この先生との出会いは、私にとって社会に興味を持つきっかけとなり、現在の仕事にも活かされている気がします。

忘れられない 「ばってん荒川さん」との出会い

有名無名にかかわらず、頑張っている人に会えるのがこの仕事の醍醐味ですね。特に、故ばってん荒川さんとの出会いは、私に大きな影響を与えてくれました。お客様に対する誠意や礼儀、仕事へのひたむきさなど多くの事を学ばせていただいたんです。

あるとき荒川さんがおつしやいました、「美香ちゃん、笑顔が一番のお化粧ばい」と。どんなにお化粧で飾っても、本物の笑顔にはかなわない。本物の笑顔でなければ、視聴者の皆さんにはすぐにはれてしまつと。荒川さんは亡くなられた今でも私の人生のお師匠さんです。

出会いに感謝、 いつも周りに恵まれて

もともと楽天的なんでしょうか。今までの人生でつらかったことって特にないんです。とにかくいつも周りの人に恵まれていて、ピンチになると必ず誰かが手を貸してくれる。本当に周り

に支えられて今の自分があるという感じですね。

アナウンサーになるという夢に近づけたのも、人の縁によるものが大きいんですよ。学生時代、「アナウンサーになりたい」と事ある毎に言っていたら、ある人からテレビ局でのアルバイトの話をしていただいたんです。アルバイトではイベントの司会などをやっていました。

自分の経験から、後輩の皆さんにも「夢は声に出してとにかく言ってみて」と言いたいですね。夢を誰かに語るなんて、恥ずかしいなどと思わずに、思い切って言ってみる事です。自分なりに表現してみてください。すると、そうなるための情報や人の縁が必ずやってきます。誰かに言った瞬間、夢は確実に実現へ向かって一歩前進していると思えます。

International exchange

国際交流



国境を越えた共同研究で 若い世代をもっと元気に、ハッピーに

開発途上国の経済や社会の発展を支援する、独立行政法人国際協力機構JICA。熊本大学は2006年に、大学単独としては初めてJICA大型プロジェクト「スラバヤ工科大学情報技術高等人材育成計画」の業務受託契約（一括受託）を結びました。国境を越えて大学の人材育成のノウハウを提供するこの事業を総括する大学院自然科学研究科・宇佐川毅教授に、プロジェクトについてうかがいました。

法人化により実現した ビッグプロジェクト

「インドネシアも日本も、研究や交流を通じて若い世代が元気でハッピーになってくれれば」と、プロジェクトの大きな目標を語る宇佐川教授。熊本大学が法人化したことで、契約当事者として企業と同じ立場で従事できるようになり実現した事業ともいえます。

これは東部インドネシア地域で、工学分野における中心的な教育機関ともいえるスラバヤ工科大学と協力して、情報通信技術（ICT）分野での高度な人材を育成し、大学や産業界、政府研究機関間での連携を強めることを目的と

したプロジェクト。インドネシアの研究グループが選定したテーマと、それにベストマッチな日本の研究者グループが行う共同研究を軸とし、そのプロセスを通じて研究指導能力や研究レベルの向上を目指します。

受託契約の4か年で行う研究テーマは全部で12。たとえば、スクール時に不安定になりやすい無線通信を安定させることを目指した研究では、「インドネシアの研究者が、スクール時の電波伝搬特性の測定に加え、雨粒の大きさや数の分布の計測を行い、日本側の研究者が行った数値解析結果との関係を共同で研究することで、研究を進めていきます。まさに日本とインドネシアの共

同作業ですよ」。双方にやりたい思いがあるからこそ、共同研究としての真価が発揮できるのです。

人の往来や交流に根ざした 共同研究

熊本大学のプロジェクト主要メンバーは4名。研究・指導のみならず、事務的役割から留学生のサポートまで、その業務は多岐にわたります。教授と学生が一緒に研究を進めていく日本のゼミの形式や雰囲気などを、スラバヤ工科大学の研究室に足を運んで直接伝えるなど、現地との「触れ合い」を大切にしています。「文化や慣習の違いを尊重しあうことも必要です。留学生には



宇佐川教授とともにプロジェクトをサポートする大学院自然科学研究科苗木禎史（ちさき よしふみ）助教（左）と、JICAプロジェクト熊本事務局の千代丸絵美子さん（中央）

礼拝の場所を提供したり、現地でもフラマダン月にはきちんと休憩の時間が確保できるように配慮しながら、お互い

6月6日 / 熊本大学 TOEFL 講座を実施

熊大学生の英語力向上と交流協定校等への海外派遣推進のため、全15回行われました。(7/25まで・22名参加)

12日 / シリーズ留学説明会「留学経験のある卒業生に聞いてみよう1」を開催

18日 / シリーズ留学説明会特別編「フランス留学説明会」を開催

22日 / 熊本大学他、講演会「国際技術移転にかかわる人材にはどのような資質が求められるか ―国際技術移転事情―」を開催

日本と米国で弁理士の資格を持つ矢口太郎熊本大学客員教授により、国際技術移転事情について事例をまじえた講演が行われました。

25日 / 韓国・朝鮮大学校来学(本学附属図書館と交流)

26日 / シリーズ留学説明会「留学経験のある卒業生に聞いてみよう2」を開催

28日 / 留学生センター、留学生スピーチ発表会を開催

熊大の留学生が、日頃の学習の成果として、日本に来て感じたこと、自国の文化、日本との対比などについて発表を行いました。



7月3日 / シリーズ留学説明会特別編「オーストラリア留学説明会～英語を使った仕事と楽しさ～」を開催

4日 / 米・キーン大学及びオーシャン・カウンティ短期大学来学

5日 / シリーズ留学説明会「留学は役に立つ!～企業の立場から～」を開催

9日 / GP 国際シンポジウム「ITを活用した教育の全学展開に向けた戦略」を開催

4名のパネリストを国内外から招き、欧州及び日本の大学のeラーニングへの取り組みについて、紹介・議論が行われました。(88名参加)

11日 / 韓国・国立釜慶大学校(工学部・自然科学研究科 部局間交流協定校)来学

本学工学部学生会を中心とした日本人学生・韓国人留学生及び釜慶大学校の学生による学生生活等についてのディスカッション及び学生交流会が行われました。

17日 / 韓国・培材大学校(大学間交流協定校)来学

30日 / タイ・AIT(Asian Institute Technology)来校

30日 / 本学初の日本体験プログラム「アジア国際連携人材育成プログラム2007」を実施

中国、韓国、台湾の大学生25名が参加し、日本事情に関する講義、日本文化体験(着物・茶道・華道)及び見学旅行(発電施設・環境施設等)等が行われました。(8/11まで)



8月5日 / カナダ・アルバータ大学で、海外語学セミナーを実施(9/1まで)

熊大学生28名がカナダで4週間にわたって語学研修及び異文化交流体験等を行いました。同様のセミナーが、韓国・東亜大学(8/5-8/18・7名参加)、韓国・培材大学(8/11-8/25・4名参加)、独・フライブルグ大学(8/30-9/27・21名参加)、中国・上海師範大学(8/18-9/1・10名参加)で行われました。

21日 / 中国・華東政法大学(法学部 部局間交流協定校)副学長一行来学



29日 / 熊本留学生交流推進会議

熊本県内の大学、高等専門学校、国、地方公共団体等の代表者20名によって、熊本地域における留学生交流の推進に関して協議が行われました。



定期的にインドネシアに足を運び、研究のコーディネートを行う宇佐川毅大学院自然科学研究科教授

共同研究資金では研究機材も購入されます。新しい機材の説明を熱心に聴くスラバヤ工科大学の学生やスタッフ



スラバヤ工科大学で行われた研究主体導入ワークショップでは、プロジェクトリーダーの宇佐川教授が講演を行いました



が無理せずに行っている」と宇佐川教授。異文化を理解していきます。このパートナーシップが、

継続性のあるプロジェクトにつながります。またこの事業では、熊本大学全体として教員の派遣や大学院自然科学研究科への留学生の受け入れを推進したり、テレビ会議を活用したりリアルタイムでの講義や討論といった草の根活動的な交流もサポートしています。そして2007年5月には熊本大学とスラバヤ工科大学との大学間交流協定も締結。2008年には留学フェアも予定されており、交流のさらなる広がりと深まりが期待されます。

工学部研究資料館(旧機械実験工場) 日本機械学会の『機械遺産』に認定



開館は不定期。見学を希望する方は、事前にお問い合わせください(電話 096-342-3521)。大学祭やオープンキャンパスの時には実際に機械が動く様子を見ることができます。



日本機械学会の創立百十周年を記念して、機械技術に関わる歴史的遺産を次世代に伝えようと設けられた『機械遺産』(25件)に、本学工学部研究資料館の旧機械実験工場と工作機械群が選ばれました。

旧機械実験工場は、旧熊本高等工業学校の機械実験工場として、明治41(1908)年に竣工され、現在は工学部研究資料館として利用されています。また、建物内部に展示している工作機械群は、明治33(1900)年から昭和5

(1930)年にかけて、主にドイツなどから輸入した旋盤や同工場で作られていた実習用旋盤などで、当時と同じように動くよう修復整備、動態保存されています。工作機械のうち11点と旧機械実験工場は、平成6(1994)年に国の重文指定を受けていますが、今回の認定によって、その重要性をさらに多くの方に認めていただく好機となりました。

大学職員ソフトボールチーム 全国大会初出場！

本学教職員のソフトボールチームが、今年6月に開かれた県予選で初優勝し、9月に石川県金沢市で開かれた第22回全日本壮年ソフトボール大会に初出場。1回戦は広島クラブ(広島県)と対戦し、6-2で勝ちましたが、2回戦は厚木クラブ(神奈川県)に6-5で惜敗しました。

同チームは、7年前に創部され、昼休みの短い時間や、土・日曜日に練習を積み重ねています。現在の部員数は40名。今大会の出場は、40歳以上の部員で構成する壮年チームでしたが、40歳以下の部員で構成する若手チームも九州大会に出場するなど、着実に力を付けています。



大学院教育学研究科1年の岡村良美さん 第62回県美展で大賞を受賞

大学院教育学研究科1年の岡村良美さんが制作した彫刻「ゆうにじに想いを」が、熊本県美術協会が主催、熊本県文化協会などが後援する「第62回県美展」最高賞の県美大賞を受賞しました。

岡村さんの作品は、右手を上にかざしながら天を見上げる裸婦の像。審査では「写実の確かさ」と強い存在感を感じさせる「独自の造形」が高く評価されました。



受賞作品のそばで笑顔の岡村良美さん

開学以来の快挙！ 陸上競技部の岩本慎一郎さんがユニバーシアード夏季大会で善戦

8月にバンコクで開かれたユニバーシアード夏季大会に、陸上競技部の岩本慎一郎さん(教育学部生涯スポーツ福祉過程4年)が、男子100メートルに、開学以来の快挙となる初出場を果たしました。岩本さんは6月に国立競技場で行われた天皇賜杯第76回日本学生陸上競技対抗選手権大会兼第24回ユニバーシード競技大会日本代表選手最終選考競技会の男子100メートルで、自己ベストにはとどかなかつたものの10秒58の好タイムで2位に入賞、ユニバーシアード夏季大会に出場しました。同大会では、一次予選を突破して二次予選に進み、10秒71のタイムで全出場者中16位でしたが、各組4着までというルールがあり、惜しくも準決勝には進めませんでした。

また、4×100メートルリレーにも出場。決勝で39秒45のタイムで5位に入賞しました。



武夫原グラウンドで練習する岩本慎一郎さん

EVENT 掲示板

大学祭“熊粋祭”

- 開催期間：平成19年11月2日(金)~4日(日)
- 開催場所：黒髪キャンパス

医学部祭“本九祭”

- 開催期間：平成19年11月2日(金)~3日(土)
- 開催場所：本荘・九品寺キャンパス

夢科学探険 2007

理学部探険、工学部探険、もの・クリ challenge、第54回化学への招待

今年から自然科学系の各イベントを大学祭の日に同日開催します。毎年多くの皆さんに好評の体験型のイベントのほか、学生の作品展示も行います。来て、見て、触れて、「科学」を楽しんでください。

- 開催日時：平成19年11月3日(土)午前10時~午後4時
- 開催場所：熊本大学理学部・工学部・大学院自然科学研究科
- 問い合わせ先：夢科学探険2007事務局 TEL・FAX 096-342-3459
E-Mail: yume@chem.kumamoto-u.ac.jp
- http://www.chem.kumamoto-u.ac.jp/act/yume_index.html
- 参加対象者：小~高校生、一般の方 ■事前の申込：不要

“本九祭”共同企画『生命の誕生 全ては1個の卵から』

生きている実験動物や組織標本の展示と高性能顕微鏡観察。研究紹介、グローバルCOE紹介、研究者をめざす女子中高生のための男女共同参画相談デスクなど楽しい企画が満載です。

- 開催日時：平成19年11月2日(金)~3日(土)
- 開催場所：熊本大学発生医学研究センター 1階カンファレンス室
- 問い合わせ先：発生医学研究センター 臼杵(096-373-6577)
- 参加対象者：どなたでも ■事前の申込：不要

Book
Vol.18

おすすめの一冊



医学部保健学科教授

森田 敏子

何気なく生活していると、何もかもがつまらなく、もう少しましなことはないか、自分ほど恵まれない人はいない、あの人より不幸だと思ったりします。生きているすばらしさに気づかず、自分を見失ってしまう時、生きている幸せを実感させてくれ、勇気づけてくれるのがこの本です。

星野氏は中学校の体育の先生として行った模範演技に失敗し、脊髄損傷となり、首から下が麻痺します。身体の自由を失い絶望の淵にいた星野氏に、横向きで口に筆をくわえて文字を書く提案をした看護学生のなにげない一言で、星野氏は口に筆をくわえて文字を書く練習を始めます。

そうして出来上がったのが、この詩画集です。口に筆をくわえて、絵の具や水の量など言葉で細かく指示して、妻がそれを何度も別の紙に塗り、星野氏に見せながら色を作るという作業を繰り返して作品を完成させていきます。ここに作品を2つ紹介しますが、『かぎりなくやさしい花々』も感動する本としてお勧めします。

日々草(23頁)

今日も一つ 悲しいことがあった 今日もまた一つ うれしいことがあった

笑ったり泣いたり、望んだり あきらめたり にくんだり 愛したり.....

そして これらの一つ一つを柔らかく包んでくれた

数え切れないほど沢山の平凡なことがあった

《花の詩画集》 鈴の鳴る道

星野富弘著 偕成社



くちなし(52頁)

鏡に映る顔を見ながら思った

もう 悪口をいうのはやめよう

私の口から出た言葉をいちばん近くで聞くのは私なのだから

車椅子生活になって12年目、その間、道のでこぼこが良いと思ったことは一度もない。脳みそまでひっくりかえる振動にお手上げで、力の弱い電動車椅子は止まってしまう。小さな鈴をもらった星野氏は、手で振って音を出せないで、車椅子に付けて道路を走る。ある日、小さなでこぼこがあり、慎重に動かしながら、そこを通りぬけようとした。その時、車椅子につけた鈴が「チリーン」と鳴った。心にしみる澄んだ音色だった。もう一度その音が聞きたくて、引き返してでこぼこの上に乗ってみる。「チリーン」「チリーン」小さいけれど、ほんとうに良い音だ。その日から、道のでこぼこを通るのが楽しみになった。

人も皆、この鈴のようなものを、心に授かっている。整えられた平らな道を歩いていたら鳴ることがなく、人生のでこぼこ道にさしかかった時、揺れて鳴る鈴。美しく鳴らし続ける人もいるかもしれないし、閉ざした心の奥に押さえ込んでしまっている人もいるだろう。鈴が澄んだ音色で歌い、キラキラ輝くような毎日が送れたらと思う。

CAMPUS 歴史さんぽ

「龍南健児の像」

龍田山の南を闊歩した青春群像

熊本は龍田山の南、龍南の地に、5万坪という広大な敷地に設立された旧制第五高等学校。平成9年10月10日、五高110周年を記念して、東京五高会によって建立された「龍南健児の像」は学生服にマント、下駄姿。

ここで青春の日々を送った生徒たちの姿を今に伝えます。台座には「剛毅木訥」の文字が記され、五高魂を私たちに語りかけてくれます。



五高記念館に「熊本大学歴史散策マップ」が置いてあります。

編集後記

お菓子会社や自動車メーカーは競合する商品を製造・販売している。しかし、チョコはチョコ、自動車は自動車であるから本質的には違いがなく、自社製品のアピールは細かい差・特徴を強調せざるを得ない。もちろん「良い商品」であることは当然の前提であり、製品・価格・流通・プロモーションの各要素でマーケティングが展開され、消費者のニーズが把握された上で商品が製造・販売されていく。

「お菓子会社や自動車メーカー」→「大学」、「商品」→「研究・授業」という図式は当てはまる。では、「マーケティング」は理論的に把握・認識・実践されているのだろうか？「お医者さんごっこ」では病気は治らない。「弁護士なし」では裁判に勝てない。私立大学は当然やっている。

さて、熊大(各学部)は生延びることができるか。

(田村 耕一)

編集委員

糸 和彦 発生医学研究センター

田中尚人 大学院自然科学研究科

田村耕一 法学部

西村兆司 広報戦略主幹

熊本大学広報誌
熊大通信
KUMADAI TSUSHIN

皆様のご意見・ご感想をお寄せください。

2007年10月発行 編集・発行 / 熊本大学
〒860-8555 熊本市黒髪2丁目39番1号 TEL.096-342-3119 FAX.096-342-3007
sos-koho@jimu.kumamoto-u.ac.jp

熊本大学公式ホームページ
<http://www.kumamoto-u.ac.jp/>

阿蘇の噴煙に憧れ、 五高で万葉集に出合った

日本最古の歌集「万葉集」の研究者・犬養孝（大阪大学名誉教授）。

東京生まれながら、阿蘇の噴煙にあこがれて

第五高等学校に入学したという。

犬養は五高で「万葉集」と出会い、

生涯をその研究に捧げた。

全国の万葉故地を自分の足で歩き、

「万葉風土学」を提唱する一方、

犬養節といわれる独特の朗唱とともに、

多くの人に万葉の魅力を語りかけた。

その朗々たる調べにファンも多く、

今もCDが発売されているほどだ。

まことに稀有の、そして偉大なるこの万葉研究家を育んだのも、

ほかならぬ五高だった。

奇しくも今年は、彼の生誕 100 年にあたる。



最後列中央が犬養孝



若き日の犬養孝。旧友のアルバムより

五高は今年120周年を迎えます

熊本大学ユニバーシティ・ミュージアム

五高記念館は国の重要文化財に指定され、本学のシンボルとなっています。このほかにも、重要文化財等の赤煉瓦建物群や登録文化財となっている建物、また、他のキャンパスで保存・活用されている施設があり、これらの建物・施設・資料等から成る熊本大学博物館の実現を目指しています。その第一歩として、平成18年度から五高記念館の整備に着手し、高等教育研究資料館としての個性を持たせ、フフカディオ・ハーンや夏目漱石など、いくつかのテーマごとに史・資料の整備を進め、展示・公開しています。

[開]10:00~16:00(入館は~15:30) [休]火曜、年末年始

※3~10月の祝日と11~2月の土・日曜と重なる祝日は開館 入場無料

TEL: 096-342-2050 HP <http://www.goko.kumamoto-u.ac.jp/>

